

# 多様だった町の川、水生活の豊かさ

東京大学 名誉教授 篠原 修

## はじめに

我が国の気候は、古く志賀重昂が「日本風景論」で言うように多雨であり、そのお陰で植生は豊か、更には地形が急峻で麓が細かい。豊かな水は山から滝、溪流となって流れ下り、扇状地で乱流し、やがて大河となって平野を流れ海に入る。川の流れそのものが多様であることに加え、既に弥生時代から水田稲作が農業の中心であったから、水の利用に関しては様々な工夫がこらされた。その結果、日本の川はヨーロッパは勿論のこと、いや多雨の東南アジアに較べても極めて多様なものとなったのである。この多様な川に対する触れ合いが、日本人の多様な体験となって現れ、日本人の水生活を豊かにしてきたのだと考えられる。以下では日本人の多様な体験を、町との関係を軸に気ままに述べてみよう。

## 1. ドブ川、ふれあいの始まり

我々の生活に最も密着した川は、家の前のドブ川であった。多雨な日本では家の周りの排水溝は不可欠の装置であったから、勿論、筆者の家の前にもドブ川があった。幅は30から40cmといった処だったろうか。ここで何をしていたかと言うと、大人になった今では本当だったのだろうかと思うのだが、笹舟を作ってそのドブ川に浮かべ、隣近所のガキ共と速さを競って遊んでいたのである。今のドブ川にはそんな流量はない。考えてみれば、昔の便所は汲み取り式で、雨水や家庭排水の下水道もなく、雑排水はドブ川に流れこんでいたから、流量があったのだろう。幼稚園から小学校低学年、川との触れ合いの始まりである。

これは山の手や郊外の住宅地の体験だが、街中では違ったドブ川があった。筆者には体験が無いので小説の話を借りよう。樋口一葉の「たけくらべ」には周知のように、吉原裏のドブ川が、主人公みどりの人生を暗示する存在として登場する。それは汚れた、黒く濁った、お歯黒ドブである。そしてそれは、黒く濁った存在である事に止まらず、非日常の世界、吉原を日常の世界から画する結界の川なのであった。郭の外にいる、みどりは、いずれそのドブのどちらに属する事になるのだろうか。そういう、みどりの将来を暗示させる存在がそのドブ川なのである。更に言えば、小説家樋口一葉の薄幸な人生を暗示しているドブ川なのだとも言えよう。

家の前のドブ川は少年期体験の川の象徴、お歯黒

ドブは心揺れ動く少女の未来を暗示する川の象徴であろうか。

## 2. 爽やかなドブ川と生活の上水路

余り話を暗くしてはいけない。明るいドブ川に移ろう。山間や扇状地に成立した町には、ドブ川ではない爽やかな排水路が存在する。これは次に述べる用水路ではなく、単なる排水路である。筆者の仕事で出会ったのは富山市八尾の排水路。9月頭の「風の盆」で有名な町である。これも排水路であるから、家の前。こんなドブ川があったらさぞかし良かっただろうと思った川だった。水量は豊富、流れは急。水は音をたてて流れ、道を歩いているだけで気分がよい。さぞかし笹舟は早く走らさうと想像するだけで楽しくなる流れだ。家の前の排水路が楽しみの対象になる町は、世界にどれ程あるのだろうか。しかし八尾は決して特別ではなく、こんな町は日本のいたるところにあったのだ。もっとも風の盆の胡弓の音と、水の流れの音が呼応する処はそうはないだろうが。



写真-1 富山市八尾のメインストリート諏訪町。道の両側の側溝を水が音をたてて流れる。

次は排水路ではなく、生活の為の用水路。昔は水道は無いのが普通だったから、飲料水や台所、風呂などに使う生活用水は井戸か、川から引く用水にたよっていた。つまり日本の山間の町では町中に用水路が張り巡らされているのが普通だった。有名処では郡上八幡。洗面、野菜洗い、洗濯に使われていた。筆者の関与した町では島根県の津和野町。ここでは残念ながら水が流れていない水路が多い。同様に関与した町では、福井県の勝山。ここには自噴の井戸も健在で、地元では清水と書いて「しょうず」という。仕事仲間の小野寺康、南雲勝志と共にデザインして、町中の大きな清水「おおしょうず」を復活し、その下流の水路も整備した。この手の生活の用水路は主婦の川であると言えよう。女の子だったら、母親を手伝った思い出の、少女時代の川という事になるのだろうか。



写真一 福井県勝山市の町中にある大清水(おおしょうず)。広場を整備して泥を掃除すると、コンコンと湧く水が蘇った。



写真二 大清水から湧いた水は家屋の裏手を水路となって流れてくる。格好の子供の遊び場だ。

### 3.農業用水路と新興住宅地

用水路が存在する町は、概ね近代以前からの古い町である。ここでは庶民の生活が用水路にしっかりと溶け込んでいる。ここでは、些か違う関係のあり方を述べよう。かつての都市近郊の農村には農業用の水路が引かれていた。その周辺が開発されると、水路と町には違った関係が生まれた。筆者が育った東横線沿いの川崎側の町もそんな町だった。その農業用水路の代表が二ヶ領用水である。多摩川から宿河原堰で取水された水は、多摩川に沿って川崎の田畑地帯を流れ下る。ここは戦後に宅地化された新興住宅地であったから、会社の寮や社宅が多く建設されたのだ。東京から言えば、多摩川の川向うだから土地も安かったのである。

サントリー宣伝部の社員、山口瞳も南武線沿いの社宅に住んでいた。筆者は社宅ではなく親父の自宅に住んでいたから、多少は違うものの、水路との関係や住環境は同じようなものだったと思う。新開の住宅地の周辺には、柿や梨の畑がそこに残り、平屋や二階建ての住宅とパッチワーク状の風景となっていた。山口瞳はこのサントリーの社宅で「江分利満氏の優雅な生活」を執筆していた筈である。充実しているような、何かしっくりしないような仕事。しっくりとそれだけに満足しているなら、仕事以外に小説など書こうとはしないだろう。そして夜遅く帰っても、休日を過ごすにも、何故かしっくりこない、何処かよそよそしい町。その思いはそのような町で育った筆者には想像するに難くない。山口は、後に売れっ子になって国立市に転居する。しかしここでも、しっくり来たかどうかそれは疑わしい。農業用水路のお陰で開かれた武蔵野台地の農村、その

農村があって出来た新開の住宅地。関係があるようで、しかし用水路とは疎遠な町の住民の生活。山口の小説、エッセイには二ヶ領用水も玉川上水も登場しない。

玉川上水は二ヶ領用水より歴史のある用水路である。周知のように、これはそもそも江戸の町の為の上水路であった。それが次第に農業用水路としても使われるようになり、玉川上水沿いの台地に農村が開かれていく。そして明治以降、中央線が出来て郊外住宅地となっていく。二ヶ領用水と同じパターンだが、ここは東京府、東京都だったので早くから開け、高級住宅地となった。だが、やっぱり町と用水路の関係は緊密ではない。住民にとっては、それは上水路でもなければ、生活用水でもないのだから。春の花見の場所であり、散策の場所以上のものではない。生活との密着度が違うのだ。中央線沿線には数多くの文人が住んだ。だが、その記述にも玉川上水は登場する事は余りない。「武蔵野」の国木田独歩、「多甚古村」の井伏鱒二、「人間失格」と「津軽」の太宰治など。太宰が玉川上水で入水自殺したのは、この町の住民と用水路の関係を象徴する、と言っただけでは言い過ぎになるだろうか。常日頃から親しんできた用水路で自殺するであろうか、人間は。新興住宅地となった町の住民にとっては、何処かよそよそしいのが農業用水路なのであった。散策をするにはよい川なのだが、自分の川ではない、そういう川の典型であろう。

### 4.粋な川の条件

洗練された町に川があれば、逆に良い川に惹かれて洒落た町が出来れば、どちらでもよいのだが、そこに粋な川が成立する。前者の典型が京都の鴨川、後者の典型が洛東の白川だろう。鴨川の栈敷の体験はそう何度もした訳ではないが、鮮明な印象として残る。彼方に臨む東山、此方の洛外の町並み、足下を流れる鴨川。夏の夕暮れの生暖かさが残る空気と、川からの思いなしの冷氣。親しい友人と酌み交わす酒。何拍子も揃った環境ではある。しかし冷静に考えてみれば、鴨川はそんなに素晴らしいと言えない川ではない。東山と川に張り出した川床、道具建てがよいのだ。だから、こういう空間は日本のどの川



写真三 京都鴨川の川床。ただの風景の良い川を粋な川にするのは、川床という装置である。



でも出来る筈なのである。川がただの川だけではダメで、そこにそれを楽しむ装置が必要なのである。

川ではないが、都市の広場も同じ。日本では平らな土地を作り、舗装し、周りを画すれば広場になると思っている。それは誤りである。空いたスペースは建物で画されていなければ、広場にはならない。オープンスペースは建物や何らかの装置とセットになって始めて、魅力的な空間となるのである。だから日本の広場は大抵がつまらない。渋谷のハチ公前広場がそれなりなのは、建物が広場に面しているからである。粋な川の実現を河川法が邪魔していると言ったら言い過ぎになるか。

次に、祇園の白川。ここにも何回かは行ったことがある。さらさらと流れる白川沿いの道を歩き、目当ての店に上がる。白川沿いを歩いていると、店を探すブラブラ歩きは少しも苦にならない。むしろすぐに見つかると残念な気になる程だ。店に上がって、水の音を聴きながらの一杯、やはり粋な気分になる。ほろ酔いで外に出ると、やはり白川の水はさらさらと流れている。その音を聴きながらフラフラと歩き、仕方が無い、宿に帰るかということになる。東京で地下鉄で帰るのは大違いだ。だが本当に粋な白川の楽しみ方は、祇園に泊まらねば解らないのだろう。泊まって、ひと風呂浴びて、更に一献しごろりと横になる。白川のせせらぎの音は静まった枕元にも届いてくる。

「かにかくも祇園恋しや枕の下を水の流るる」である、吉井勇である。残念ながら、こういう粋な白川を体験したことはない。東京は隅田川でもこういう粋な川の楽しみ方はあった。隅田川は河口の川だから流れの音はなかったが、舟を漕ぐ櫓のギイギイという音や満ちてくる潮の音はあった筈である。料亭で飲み、乗船して楽しむ。隅田川も、楽しみ方は違ったにせよ、粋な川であったのだ。鴨川の川床で述べたように、建物や装置と切り離されてしまうと、川は単なる水路に墮してしまう。近年の広島の大田川のような川辺に建物、装置を引きつける試みももっとなされてよいと思う。粋な川は、熟年の川である。こういう川が衰退したという事は、日本から熟年文化が失われたという事を意味するのであろう。

## 5.大河、慰謝と希望

永井荷風が隅田川の川向う、墨東の向島に入り浸っていたことはよく知られている。この川向うの地の玉の井での体験が「墨東綺譚」を産み出したのであった。荷風は当初から川向うを好んでいたわけではなかった。なに、その前は人並に銀座のタイガーなどのカフェで遊んでいたのであった。それが噂スズメの格好のゴシップになる事を恐れて、遊び場を

川向うに移したのであった。だから、荷風は川を、吉井のように好んでいたわけではなかったのだろう。墨東の地にも飽きははじめた頃から、荷風はより田舎の地に好んで出かけるようになる。隅田川を越えて、荒川へ。荷風は小石川区の生まれで、都会っ子だから故郷の如き風景を求めて、路面電車を乗り継いでわざわざ荒川くんだりまで出かけた訳ではない。放蕩三昧を尽くしたアメリカやフランスでの生活にも、田園や川の話は登場してこない。話をもっぱら女と都会に限られている。忍び寄る老いの自覚と、些か疲れを覚えはじめた遊興の生活から逃れて大河に慰謝を求めたのであろう。最晩年の地は、千葉県市川だった。荷風は市川の川と大河である江戸川の辺りをよく散歩している。ウロウロと散歩するのは荷風の趣味だったから不思議はないが、川を選んだのは、やはり慰謝を求めてのことだったのだと思う。

これは多摩川の近くに育った筆者の実感でもある。荷風のように年老いてはいなかったが、受験勉強に疲れると多摩川の土手に、河原に救いを求めたものだった。老年程の切実さはないが、これも一種の慰謝要求の行為であったと今になって思う。広々とした何もない空間が、ゆったりと流れる水面が精神に安らぎをもたらすのであろう。荷風が訪れた荒川や江戸川には勿論行ったことがある。ただ広いだけの、何の魅力もないところだった。多摩川は東京側に台地の緑があり、まだましである。つまり、こういうことなのだろうと思う。大河は他所者にとっては何の変哲もない川である。風景としての見所はないのだから。しかし、その沿線に住む者にとっては、何者にも変え難い気晴らしの、慰謝の空間なのである。その川の空間は家の前のドブ川や町中の水路のように生活に密着している訳ではない。



写真一五 東京、千葉の江戸川。何にもない、ただひたすらに広い空間。

しかし、新興住宅地の農業用水路のようによそよそしいものではない。付かず離れずの位置にあって、落ち込んだ時には頼りになる川なのである。

これは勿論、東京だけの話ではない。多摩川沿いにしか住んだことがないので、ここでも他人の例に頼ろう。花巻生まれの石川啄木にとっては、大河、北上川がそういう存在だったのだろう。啄木は、井

上ひさしの「弱虫泣き虫、石川啄木」ではないが、実に付き合いたくない、嫌な人物である。しかし「――柳青める北上の――」は心情の込もったいい詩だと認めざるを得ない。木曾の生まれの島崎藤村も



写真一六 柳川の掘割運河。北原白秋の故郷の川。都会にも故郷となり得る川の風景はあったのだ。

同じ。身近な人間を題材にした暴露小説は、「夜明け前」を例外にして、好む処ではないが、千曲川を詠った詩はやはり、素晴らしいと言わざるを得ない。川が詩心を生み、心が帰る慰謝の空間が川だったのであろう。

大河は老年専売の川ではない。若者にとっては、気持ちを奮い立たせる川であった。多摩川は筆者の心を慰めると同時に、さあやるぞと気分を切り替える空間でもあった。所は荒川の川向うの町、川口。「キューポラのある町」の荒川の土手はそういう空間として描かれていた。苦しい時にも、北風の吹く時にも、吉永小百合と浜田光夫は徒歩で、あるいは自転車で荒川の土手を走っていくのだった。この映像が当時の若者を如何に勇気づけたか、今そんな川の映画があるのだろうか。

「寅さん」の山田洋次も「下町の太陽」で若者を勇気づけるシーンを撮っていた。ヒロインは倍賞千恵子だった。川は荒川ではなく、隅田川であった。思うに、大河の良さは何もないという点にあるのだろう。風景が良ければそれに気を取られてしまうし、都会の中の運河のように人々の活動があれば、やはりそれに気を取られてしまう。ポカンとあって、自身を解放できる空間、それが慰謝と希望を可能にするのかもしれない。何もないという空間は、そこらじゅうに何かある都会では貴重な存在なのである。

## 6.人工の川・運河、都会の故郷

柳川は良いまちである。今に至っても昔の面影を残す水郷の町である。「柳川掘割物語」で有名になる前、掘割復活の中心人物だった広松伝さんに案内されて町を巡り、屋形船に乗ったのが最初だった。小雨の降る晩秋の柳川だった。沖の端には北原白秋の生家があった。札幌の仕事で駅前通りを歩きながら、待てよと考えた。「この道」の一番に出てくる、「ああ、そうだよアカシヤの花が咲いてる」はこの道だったのだと気づいた。それ以来白秋を辿り始めた。

姦通罪でブチ込まれ、傷心の心で暮らしたのが三浦半島の先端。「雨はふるふる城が島の磯にー」の「城が島」の詩はここで生まれたのだ。そんな事件もあって白秋は永らく故郷に帰れなかった。のちに有名になって故郷に凱旋。死の間際には、鳩の詩で故郷への心の回帰を果たす。柳川の掘割は人工の河川で、日本人の愛唱する「うさぎ追いしかの山、こぶな釣りしかの川ー」の如き田園の川ではない。白秋のような都市の故郷のあり方は、「故郷」の田園イメージで駆逐されてしまった。これでは都会育ちの人間は浮かばれないと思う。ほとんどが農民だった江戸時代ならそれでもいいかもしれないが、戦後の今や国民のほとんどが都市に住んでいるのだから、都市に故郷と呼べるような空間が必要なのだと思う。

新潟に行くとき、時折、新潟美術館を訪ねる。建築家、前川國男の設計。前川は東京育ちなのだが、生まれたのは新潟だった。父、前川貫一は内務省の土木技師で大河津分水の工事に従事していた。國男は幼児期に新潟を離れているから、通常で言えば新潟は故郷ではない。しかし美術館の設計を頼まれた前川は、美術館の前に公園を作り、そこにかつての新潟の町の掘割運河を再現しようとしたのであった。再現された運河は、前川が土木ではなく建築であった為か、拙劣である。だがそれ故に返って、前川の我が故郷に対する切実な思いが伝わってくるのである。新潟は故郷の運河を喪って、いや捨てて久しい。前川が再現しようとした故郷はもう戻す事はないのだろうか。これは新潟だけの話ではなく、日本全体の話だと思う。人間の手で作った人工のものにも関わらず、それが故郷と呼べる川となる。そういう優れた河川事業もあったのである。

## おわりに

こう書いてきてみると、かつての多様な川のあり様とその川との様々な付き合いが、いかに喪われ、単調で無味乾燥な川文化に墮してしまっただけか、改めて自覚される。文化とは多様性から生まれ、交流の中から生まれるものである。そしてその交流とは、人と人の交流であり、人と川の交流であろう。



写真一七 新潟市の美術館前の公園に復元された掘割運河。新潟で生まれた前川國男の思いがこもったデザイン。優れているとは思えないが、前川の想いは伝わってくる。その切ない思い故か、暗い写真となってしまった。